



Reporting モジュールのインストールとアップグレード

この章では、Reporting モジュールをインストールする方法、シスコが開発したさまざまなインストーラユーティリティを使用して Cognos ソフトウェア コンポーネントをインストールする方法、および Cisco Prime Service Catalog アプリケーションと統合する方法について説明します。

Cognos 環境は、アプリケーション サーバとデータベース サーバにより構成されます。

- アプリケーション サーバは、IBM Cognos ソフトウェアをインストールし、設定スクリプトを実行して Cognos を Cisco Prime Service Catalog アプリケーションと統合するコンピュータです。
- データベース サーバは、Data Mart や Content Store データベースが配置されているコンピュータです。

次の項では、Cognos アプリケーション サーバおよびデータベース サーバの前提条件について説明します。

Reporting をインストールするための前提条件

Cognos アプリケーション サーバの要件

オペレーティング システム

- IBM Cognos ソフトウェアは、Windows Server 2012 R2 (64 ビット) オペレーティング システムを実行するコンピュータにインストールする必要があります。
- Cognos アプリケーション サーバのコンピュータと Cisco Prime Service Catalog アプリケーションのコンピュータを別々にすることを推奨しますが、必須条件ではありません。ただし、Cisco Prime Service Catalog アプリケーションが Linux コンピュータで実行される場合、Cognos アプリケーション サーバは Windows オペレーティング システムを備えた別のマシンにする必要があります。

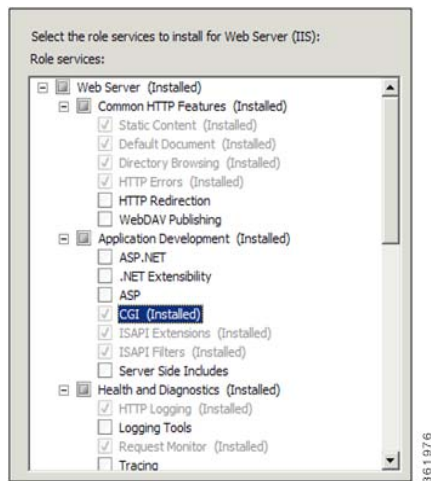
メモリおよびディスク領域

- アプリケーション サーバには、8 GB 以上の RAM および 50 GB 以上の空きディスク領域が必要です。
- %TEMP% ディレクトリを含むドライブには、2 GB 以上の空きディスク領域が必要です (Cognos ソフトウェアをインストールする場合にドライブが異なる場合)。

Internet Information Services (IIS)

- Cognos アプリケーション サーバに「Web サーバー (IIS)」の役割をインストールする必要があります。
- 「World Wide Web Publishing Service」は自動起動するように設定されます。
- IIS には「Default Web Site」という名前のサイトが必要です。
- IIS で次の役割サービスを有効にする必要があります。
 - CGI
 - ISAPI 拡張
 - ISAPI フィルター

図 7-1 Web サーバーの役割サービスの選択



Internet Explorer

- Microsoft Internet Explorer (IE) バージョン 11 と FireFox 49.0.2.xesr (またはこれ以上) がサポートされています。Cognos UI または Cisco Prime Service Catalog 内部の「Advanced Reporting」モジュールにアクセスするときには、IE11 または FireFox 49.0.x esr ブラウザを使用します。
- 次のブラウザ設定を有効にする必要があります。
 - [サードパーティの Cookie (Third-party Cookies)] の [承諾する (Accept)]
 - JavaScript
 - Run ActiveX controls and plug-ins

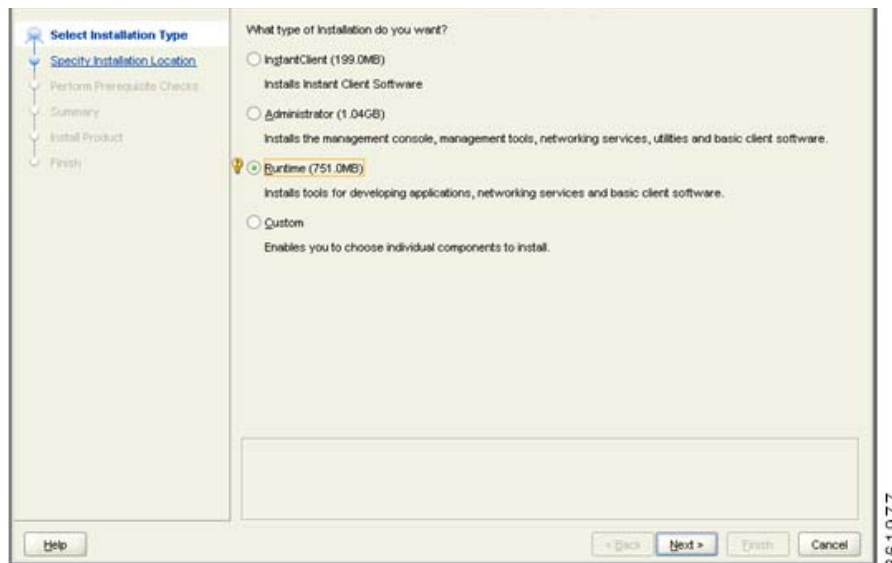
- [スクリプトを実行しても安全だとマークされている ActiveX コントロールのスクリプトの実行 (Script ActiveX controls marked safe for scripting)]
- Active scripting
- [ページの自動読み込み (Allow META REFRESH)]

Database Client Connectivity

適切な Database Client Connectivity ソフトウェアを Cognos アプリケーション サーバにインストールして、Request Center データベース、Data Mart データベースおよび Content Store データベースの 3 つすべてのデータベースに接続するように事前に設定しておく必要があります。

- **Oracle 12c:** Oracle Client 12.1.0.2 (32 ビット) ソフトウェアが必要です (Windows Server 2012 R2 オペレーティング システムは 64 ビット バージョンですが、Oracle 12c Client ソフトウェアの 32 ビット バージョンを使用する必要がありますことに注意してください)。Cognos ソフトウェア インストールには、Oracle データベースとの接続に必要な JDBC ドライバが含まれていません。そのため、Content Store データベースが Oracle の場合、Oracle Client ソフトウェアを Cognos アプリケーション サーバにインストールする必要があります。Oracle Client 12.1.0.2 をインストールするときに、[ランタイム (Runtime)] オプションを選択します。

図 7-2 [インストールタイプ (Installation Type)] を選択します。



- **Microsoft SQL Server 2012 SP3:** SQL Server Client Connectivity ソフトウェアは必要ありません。Cognos インストールには、SQL Server データベース サーバとの接続に必要な JDBC ドライバが含まれています。

その他の要件

- アプリケーション サーバの管理者権限を持ったユーザとしてログインして、Cognos ソフトウェアをインストールする必要があります。また、%TEMP% ディレクトリへの読み取りおよび書き込み権限も必要です。
- 次のマシンをすべて同じタイムゾーンに設定する必要があります。
 - Cisco Prime Service Catalog アプリケーション サーバ
 - Cognos アプリケーション サーバ
 - Service Catalog、Data Mart、および Content Store の各データベースが配置されているデータベース サーバ。
- ドメイン ネーム システム (DNS) をコンピュータに設定している必要があります。ホスト名のプライマリ DNS サフィックスが適切な値(たとえば、*mydomain.com*)に割り当てられ、ホスト名が完全修飾ドメイン名に解決される必要があります(たとえば、「ping myserver」は *myserver.mydomain.com* に解決される必要があります)。
- サービス カタログ (Service Catalog) アプリケーション サーバおよび Cognos アプリケーション サーバは同じドメインに属する必要があります。たとえば、サービス カタログ (Service Catalog) アプリケーション サーバが *mydomain.com* という名前のドメイン内のコンピュータにインストールされている場合、Cognos アプリケーション サーバも同じドメイン *mydomain.com* に属する必要があります。
- このインストールプロセスでは、ホスト名を入力する場合でも、サーバ名を入力する場合でも、完全修飾ドメイン名として入力する必要があります。たとえば、「localhost」または「cognosserver」ではなく、「cognosserver.mydomain.com」と入力します。サービス カタログ (Service Catalog) に接続する場合、たとえば、*http://servicecatalog.mydomain.com/RequestCenter* のように URL に完全修飾ドメイン名を入力する必要があります。
- このインストールプロセスでコマンドプロンプト ウィンドウを開いてスクリプトを実行する場合は必ず、コマンドプロンプト ウィンドウに出力全体を表示できるように、コマンド履歴バッファ サイズを (999 などに) 増やす必要があります。インストール ログ ファイルにはすべての出力が記録されるわけではありません。

Cognos データベース サーバの要件

Reporting モジュールは、次の 3 つのデータベースにアクセスできる必要があります。

- Service Catalog データベース
- Data Mart データベース
- Content Store データベース

Reporting モジュールは、Service Catalog データベースの他に 2 つのデータベース (Data Mart および Content Store) を必要とします。次の項では、Oracle 12c または SQL Server 2012 SP3 のいずれかで Data Mart および Content Store データベースを作成する方法を説明します。

Data Mart データベースと Content Store データベースは、Service Catalog データベースと同じタイプおよびバージョンの RDBMS 上に存在している必要があります。たとえば Service Catalog データベースが Oracle 12c 上にある場合、Data Mart データベースと Content Store データベースも Oracle 12c 上に作成する必要があります。Service Catalog データベースが SQL Server 2012 SP3 上にある場合、Data Mart データベースと Content Store データベースも SQL Server 2012 SP3 上に作成する必要があります。

データベース サーバは、クライアント接続のために TCP/IP プロトコルをサポートし、Cognos アプリケーション サーバからアクセスできるように設定する必要があります。

Data Mart および Content Store データベースには、カスタム レポート、ビュー、保存済みレポートなどすべての Cognos データが保存されるため、データベース管理者はこれらのデータベースを定期的にバックアップする必要があります。データベースのセキュリティと整合性を確保するため、無許可のアクセスまたは不適切なアクセスからデータベースを保護することも重要です。

Data Mart および Content Store データベースの作成: Oracle

新規インストールの場合、Reporting インストーラを実行する前に、この項の説明に従って Data Mart および Content Store データベースのテーブルスペースとユーザを準備するか、またはインストール ウィザードに表示される [データベースを作成する (Create a Database)] オプションを選択して、Reporting インストーラによりデフォルトテーブルスペースのデータベース ユーザを自動的に作成することができます。Reporting インストーラの [データベースを作成する (Create Database)] オプションの詳細については、「Reporting のインストール」で説明します。

Data Mart および Content Store データベースのテーブルスペースとユーザを作成するには、次の手順を実行します。

- 手順 1** Oracle データベースは、Unicode 文字セット (つまり、UTF-8 または UTF-16) を使用するように設定する必要があります。データベースの文字セットが Unicode かどうかを確認するには、次の SQL コマンドを実行します。

```
SELECT VALUE FROM NLS_DATABASE_PARAMETERS WHERE PARAMETER='NLS_CHARACTERSET';
```

NLS_CHARACTERSET パラメータの戻り値が AL32UTF8 または AL16UTF16 の場合、Oracle データベースは Unicode をサポートします。これ以外の場合、新しい Oracle データベースを作成し、作成時に文字セットとして AL32UTF8 または AL16UTF16 を指定する必要があります。

- 手順 2** ORACLE パラメータ CURSOR_SHARING を EXACT に設定し、パラメータ PROCESSES を 500 (またはこれ以上) に設定する必要があります。CURSOR_SHARING と PROCESSES の現在の値を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
SHOW PARAMETER CURSOR_SHARING;
```

```
SHOW PARAMETERS PROCESSES;
```

- 手順 3** CURSOR_SHARING が EXACT に設定されていない場合、次のコマンドを使用して変更できます。

```
ALTER SYSTEM SET CURSOR_SHARING=EXACT SCOPE=BOTH SID='*';
```

- 手順 4** PROCESSES パラメータおよび SESSION パラメータが 600 未満の場合、データベース管理者と協力して、Oracle データベースのこれらのパラメータを 600 以上に変更します。

- 手順 5** テーブルスペース DATAMART を新規に作成し、初期サイズ 500 MB と AUTOEXTEND ON を設定します。

- 手順 6** 一時テーブルスペース DATAMART_TEMP を新規に作成し、初期サイズ 30 MB と AUTOEXTEND ON を設定します。

- 手順 7** データベース ユーザ DMUser を作成し、デフォルト テーブルスペースを DATAMART に設定し、一時テーブルスペースを DATAMART_TEMP に設定します。DMUser に、DATAMART テーブルスペースに対する QUOTA UNLIMITED を付与する必要があります。DMUser は Data Mart スキーマの所有者になります。

- 手順 8** 以下の権限を DMUser に付与します。

```
GRANT
  CREATE SESSION,
  CREATE TABLE,
  CREATE PROCEDURE,
```

```

CREATE SEQUENCE,
CREATE TRIGGER,
CREATE VIEW,
CREATE MATERIALIZED VIEW,
CREATE SYNONYM,
ALTER SESSION
TO DMUser;

```

手順 9 データベース ユーザ CSUser を作成し、デフォルト テーブルスペースを DATAMART に設定し、一時テーブルスペースを DATAMART_TEMP に設定します。CSUser に、DATAMART テーブルスペースに対する QUOTA UNLIMITED を付与する必要があります。CSuser は Content Store スキーマの所有者になります。

手順 10 以下の権限を CSUser に付与します。

```

GRANT
CREATE SESSION,
CREATE TABLE,
CREATE PROCEDURE,
CREATE SEQUENCE,
CREATE TRIGGER,
CREATE VIEW
TO CSUser;

```

Data Mart および Content Store データベースの作成: MS SQL Server

新規インストールの場合、Reporting インストーラを実行する前に、この項の説明に従って Data Mart および Content Store データベースとログイン ユーザを準備するか、またはインストール ウィザードに表示される [データベースを作成する (Create a Database)] オプションを選択して、Reporting インストーラによりデータベースとログイン ユーザを自動的に作成することができます。Reporting インストーラの [データベースを作成する (Create Database)] オプションの詳細については、「Reporting のインストール」で説明します。

Data Mart および Content Store データベースとログイン ユーザを作成するには、次の手順を実行します。

- 手順 1** SQL Server は、デフォルト インスタンスまたは名前付きインスタンスとしてインストールできます。
- 手順 2** SQL Server は、混合モード認証で設定する必要があります(つまり、SQL Server 認証と Windows 認証の両方を許可する必要があります)。
- 手順 3** 「Datamart」と「ContentStore」という 2 つの個別データベースを作成し、それぞれに初期サイズ 500 MB および自動拡張率 10 % を設定します。各データベースの照合順序では、大文字と小文字が区別されないようにする必要があります。
- 手順 4** 「DMUser」および「CSUser」という名前の 2 つの個別のデータベース ログイン アカウントを作成します。



(注) DMUser と CSUser は、Windows 認証方式ではなく SQL Server 認証方式で SQL Server に対して認証される SQL Server ログイン アカウントでなければなりません。

- 手順 5** データベース ユーザ アカウント「DMUser」を「Datamart」データベースの db_owner として割り当てます。設定において、a) Data Mart データベースのユーザ「DMUser」が SQL Server のログインアカウント「DMUser」にマップされていること、b) デフォルトのスキーマが「dbo」であること、および c) ユーザ「DMUser」がデータベース ロール「db_owner」のメンバーシップを持っていることを確認します。
- 手順 6** データベース ユーザ アカウント「CSUser」を「ContentStore」データベースの db_owner として割り当てます。設定において、a) Content Store データベースのユーザ「CSUser」が SQL Server のログインアカウント「CSUser」にマップされていること、b) デフォルトのスキーマが「dbo」であること、および c) ユーザ名「CSUser」がデータベース ロール「db_owner」のメンバーシップを持っていることを確認します。

Content Store データベースのサイジング

Content Store データベースのサイズは、さまざまな要因に応じて異なります。

- 同時ユーザの数
- 保存済みレポートの数(およびレポートのページ/行/画像の数)
- 保存済みレポート ビューの数(およびレポートのページ/行の数)
- レポートのフォーマット(PDF、HTML など)

次のガイドライン(Cognos Knowledge Base の記事から編集)は、上記のパラメータから推測した使用状況に基づいて、データベース サイジング要件を予想するときに役に立ちます。

Content Store サイジングの決定要因を次に示します。

- システム容量: トランザクション ログ。Cognos による 250 アクティブ ユーザのデータベースの推定値は 3,000,000 KB です。
- 一時容量: レポート生成に必要です。推定値は、同時ユーザあたり 100,000 KB です。
- データ容量: ユーザにより保存されるレポートおよびビュー、ユーザ フォルダ、およびレポートの Framework Manager モデルを保持するために必要です。
- 保存されるレポートおよびビューの合計数は、Content Store サイジングを予想するうえで重要な要素で、予想が最も困難です。これは、各ユーザが保存できるレポートのバージョンの数を制限する Cognos 管理者により部分的に制御できます。
- 保存される各レポートのサイズは、レポート ページの数に基づきます。レポートの平均サイズに影響を与える可能性がある要因には、ページ数、フォーマットやテキストの選択、画像の有無があります。Cognos では、ユーザが作成する保存オブジェクトに対して以下の要件を推定しています。
- Cognos のこれらの各保存オブジェクトの数は、「一般的」なユーザが保存する傾向を前提としています。これらの数に各オブジェクトのストレージ要件を乗算し、Content Store 内のデータ容量に関するボリューム(ユーザ)に基づくストレージ要件の推定値を算出します。

オブジェクト	ストレージ要件(推定)	ユーザあたりの数
保存されるレポート、PDF 形式、1 ~ 10 ページ	340 KB	2
保存されるレポート、PDF 形式、10 ~ 100 ページ	440 KB	9
保存されるビュー、1 ~ 100 行	250 KB	3

オブジェクト	ストレージ要件(推定)	ユーザあたりの数
保存されるビュー、100 ~ 1000 行	350 KB	8
スケジュール(デイリーまたはウィークリー)	30 KB	2

- 一時的なディスク使用量を予想する場合のみ、これらの要件に Cognos ユーザ数を乗算する必要があります。

Cognos ソフトウェアのインストール

この項では、Cognos 10.2.1 をインストールする方法について説明します。



- (注) この項で説明されているインストール作業を実行するには、管理者権限を持つユーザとしてログインする必要があります。

Cognos ソフトウェアのダウンロード

Cognos ソフトウェアをダウンロードするには、次の作業を行う必要があります。

- 手順 1** Cisco 製品ダウンロード Web サイトにアクセスし、各自に割り当てられたユーザ名とパスワードを使用して認証します。
- 手順 2** 製品名「Cisco Prime Service Catalog Reporting」を探るか、製品セクタ内をナビゲートして、Cognos Business Intelligence インストーラおよびフィックス パックを探します。
- 手順 3** [Business Intelligence インストール(Business Intelligence Install)] を選択して、バージョン 10.2.1 の次のファイルを Cognos アプリケーション サーバマシンにダウンロードします。

ダウンロードするファイル	説明
bi_svr_64b_10.2.1_win_ml.tar.gz	Cognos 10.2.1 Business Intelligence Server (64 ビット)
bi_dmgr_64b_10.2.1_win_en.tar.gz	Cognos 10.2.1 Data Manager (64 ビット)
up_bisrvr_winx64h_10.2.5002.78_ml.tar.gz	FixPack2 for Cognos 10.2.1

- 手順 4** Cognos Business Intelligence Server zip ファイルを一時ディレクトリ (C:\cognos_bi_software など) に解凍します。Cognos Data Manager zip ファイルを一時ディレクトリ (C:\cognos_dm_software など) に解凍します。Cognos FixPack zip ファイルを一時ディレクトリ (C:\cognos_fixpack など) に解凍します。
- 手順 5** Cognos マシンに JAVA_HOME 環境変数が設定されている場合、この環境変数を削除します。これは、Cognos インストールプログラムは Cognos の組み込み Java を使用しますが、これが JAVA_HOME 環境変数で定義されている Java のバージョンと競合する可能性があるためです。Cognos ソフトウェアのインストール後に、Cognos インストール ディレクトリにある Java ディレクトリを指すように JAVA_HOME 環境変数を設定します。

Cognos Business Intelligence Server のインストール

Cognos Business Intelligence Server をインストールするには、次の作業を行います。

-
- 手順 1 C:\cognos_bi_software\winx64h フォルダを開きます(Cognos BI ソフトウェアを C:\cognos_bi_software ディレクトリに解凍したことを前提としています)。
 - 手順 2 **issetup.exe** をダブルクリックして、Cognos セットアッププログラムを起動します。
 - 手順 3 [コンポーネントの選択 (Component Selection)] 画面が表示されるまで、画面に表示されるすべてのデフォルト値を選択してインストール ウィザードを進めます。
 - 手順 4 次のコンポーネントだけを選択し、その他のコンポーネントはすべて選択解除します。
 - [アプリケーション層コンポーネント (Application Tier Components)]
 - [ゲートウェイ (Gateway)]
 - [コンテンツ マネージャ (Content Manager)]
 - 手順 5 [次へ (Next)] をクリックして、[完了 (Finish)] 画面が表示されるまで、残りのインストール ウィザードを進めます。
 - 手順 6 [IBM Cognos の設定の開始 (Start IBM Cognos Configuration)] オプションを選択解除して、[完了 (Finish)] をクリックします。
-

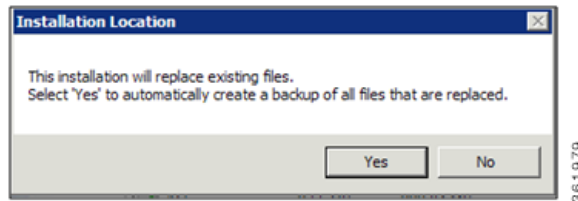
Cognos Data Manager のインストール

Cognos Data Manager をインストールするには、次の作業を行います。

-
- 手順 1 C:\cognos_dm_software\winx64h ディレクトリに移動します(Cognos Data Manager ソフトウェアがこのロケーションに解凍されていることを前提とします)。
 - 手順 2 **issetup.exe** をダブルクリックして、Cognos セットアッププログラムを起動します。
 - 手順 3 [インストール先 (Installation Location)] 画面が表示されるまで、画面に表示されるすべてのデフォルト値を選択してインストール ウィザードを進めます。
 - 手順 4 Cognos Business Intelligence Server をインストールしたフォルダと同じ名前を入力します(たとえば、C:\Program Files\cognos\c10_64)。次に、[次へ (Next)] をクリックします。
 - 手順 5 「警告: 前回のインストールと同じ場所を、インストール先として指定しています。処理を続行しますか? (Warning: You are installing to the same location as a previous installation. Do you want to continue?)」というメッセージが表示されたら、[はい (Yes)] をクリックして次に進みます。

手順 6 次のメッセージが表示されたら、[いいえ (No)] をクリックして次に進みます。

図 7-3 [インストール先 (Install Location)] 警告メッセージ



手順 7 [コンポーネントの選択 (Component Selection)] 画面が表示されたら、次のコンポーネントだけを選択し、その他のコンポーネントはすべて選択解除します。

- [Data Manager Engine]

手順 8 [次へ (Next)] をクリックして、[完了 (Finish)] 画面が表示されるまで、残りのインストール ウィザードを進めます。

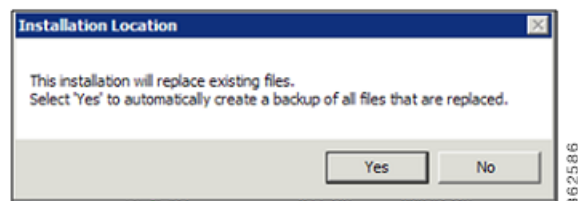
手順 9 [IBM Cognos の設定の開始 (Start IBM Cognos Configuration)] オプションを選択解除して、[完了 (Finish)] をクリックします。

Cognos フィックス パックのインストール

Cognos フィックス パックをインストールするには、次の手順を実行します。

- 手順 1 「C:\cognos_fixpack\winx64h」フォルダに移動します (Cognos ソフトウェアを C:\cognos_fixpack フォルダに解凍したことを前提としています)。
- 手順 2 **issetup.exe** をダブルクリックして、Cognos セットアップ プログラムを起動します。
- 手順 3 [インストール先 (Installation Location)] 画面が表示されるまで、すべてのデフォルト値を選択してインストール ウィザードを進めます。
- 手順 4 Cognos Business Intelligence Server をインストールしたフォルダと同じ名前を入力します (たとえば、C:\Program Files\cognos\c10_64)。[次へ (Next)] をクリックします。
- 手順 5 次のメッセージが表示されたら、[いいえ (No)] をクリックして次に進みます。

図 7-4 [インストール先 (Install Location)] 警告メッセージ



手順 6 [次へ (Next)] をクリックして、[完了 (Finish)] 画面が表示されるまで、残りのインストール ウィザードを進めます。

手順 7 [終了 (Finish)] をクリックします。

Reporting のインストール

この項では、Cisco Prime Service Catalog Reporting をインストールし、設定する方法について説明します。この項で説明されているインストール作業を実行するには、管理者権限を持つユーザとしてログインする必要があります。



(注) Reporting インストーラは Cognos に組み込みの JRE 7 を使用するため、同じシステムに Oracle JDK 1.8 または 1.7 がインストールされてはいけません。

Reporting のセットアップの実行

Reporting をインストールする場合は、インストール ウィザードをインストールして起動するためのセットアッププログラムを実行します。

セットアッププログラムを実行するには、次の手順を実行します。

- 手順 1 Cognos マシンで、JAVA_HOME 環境変数を「<COGNOS_HOME>\bin64\jre\7.0」に設定または変更します。<COGNOS_HOME> は、Cognos のインストールディレクトリ (C:\Program Files\cognos\c10_64) です。次に、PATH 環境変数の先頭に「%JAVA_HOME%\bin」を追加します。これにより、<COGNOS_HOME>\bin64\jre\7.0\bin 内の Java 実行可能ファイルが使用されます。
- 手順 2 無制限強度 JCE ポリシー ファイルを <Build_No>\reporting\ibm_jre_7.0_policy から %JAVA_HOME%\jre\lib\security ディレクトリにコピーします。既存のファイルは上書きされません。無制限強度ポリシー ファイルは、「local_policy.jar」と「US_export_policy.jar」です。
- 手順 3 シスコ Web サイトからコンピュータにダウンロードした Cisco Prime Service Catalog ソフトウェアをまだ解凍していない場合は、解凍します。
- 手順 4 **reporting_setup.cmd** をダブルクリックして、インストール ウィザードを起動します。経過表示バーが表示され、完了するとインストール ウィザードの最初のページが表示されます。

インストール ウィザードの使用方法

インストール設定オプションでは大文字と小文字が区別されるので、データベース名や JMS キュー名などの値を入力するときには大文字と小文字を区別してください。区別しないと、インストールが正常に行われなかったことがあります。

Reporting インストール ウィザードの実行

この項では、Reporting インストール ウィザードを実行する手順について説明します。

前提条件

kek_new.txt と kek_old.txt ファイルを <ServiceCatalog_Install_Dir>\dist ディレクトリから C:\temp または Reporting マシンの任意のフォルダにコピーします。インストール時にマスターキーファイルの入力を求めたら、そのウィンドウでこのパスに移動し、kek_new.txt ファイルを選択する必要があります。

- 手順 1 IIS Web サーバを停止します。
- 手順 2 インストール ウィザードを起動します([Reporting のセットアップの実行](#)を参照)。
- 手順 3 インストール ウィザードの最初のページで [次へ(Next)] をクリックし、処理を開始します。
- 手順 4 [インストールフォルダの選択 (Choose Install Folder)] パネルでインストール先フォルダを入力し、[次へ(Next)] をクリックします。
デフォルトのインストール先フォルダは、「C:\CiscoPrimeServiceCatalog」です。必要に応じて、別のフォルダをインストール先として入力するか、または [選択 (Choose)] をクリックして別のフォルダを選択します(またはフォルダを新規作成します)。インストール先フォルダのパス名にはスペースを使用しないでください。このマニュアルでは、インストール先フォルダを <Reporting_Install_Dir > で表します。
- 手順 5 Cognos のルート ディレクトリを入力します。これは、Cognos 10.2.1 ソフトウェアがインストールされている場所です。デフォルトの Cognos ルート ディレクトリは「C:\Program Files\ibm\cognos\c10_64」です。必要に応じて、別のルート ディレクトリを入力するか、または [参照 (Browse)] をクリックして目的のディレクトリを選択します。[次へ(Next)] をクリックします。
- 手順 6 [データベースの選択 (Database Selection)] パネルで、データベース プラットフォーム (Microsoft SQL Server または Oracle) を選択して、[次へ(Next)] をクリックします。
以前に記入した[データベース情報ワークシート](#)を参照して、データベース プラットフォームを決定します。
- 手順 7 [Service Catalog データベース (Service Catalog Database)] パネルで、Service Catalog データベースの設定値を入力します。[Service Catalog データベース (Service Catalog Database)] パネルの値の更新については、[表 7-1](#) を参照してください。以前に記入した[データベース情報ワークシート](#)を使用すると、入力する設定値を決定する上で役立ちます。

表 7-1 Reporting 向け Request Center データベース テーブル

フィールド	SQL Server	Oracle サーバ
[ホスト IP アドレス (Host IP Address)]	Service Catalog データベースが配置されているサーバの IP アドレスを入力します。	Service Catalog スキーマが配置されているサーバの IP アドレスを入力します。 Oracle RAC を使用する場合は、SCAN IP アドレスのみを使用します。
[ポート (Port)]	データベース サーバが使用する TCP/IP ポート番号を入力します。有効なポート番号は 1 ~ 65535 です。デフォルト値は 1433 です。	データベース サーバが使用する TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1521 です。
データベース名 (Database Name)	RequestCenter データベースの名前を入力します。デフォルト値は「Service Catalog」です。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。	N/A

表 7-1 Reporting 向け Request Center データベース テーブル(続き)

フィールド	SQL Server	Oracle サーバ
[データベース SID またはデータベースサービス名 (Database SID or Database Service Name)]	N/A	Oracle データベースへの接続に SID を使用する場合は、[SID] オプション ボタンを選択し、Oracle SID の値を入力します。Oracle データベースへの接続にサービス名を使用する場合は、[サービス名 (Service Name)] オプション ボタンを選択し、サービス名の値を入力します。 Oracle RAC を使用する場合は、サービス名のみを使用します。
[ユーザ名 (Username)]	データベース ユーザ名を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。このユーザ名は、ログイン ID と「ServiceCatalog」データベースの db_owner です。デフォルト値は「CPSCUser」です。	データベース ユーザ名を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。このユーザ名は、データベーススキーマのログイン ID とスキーマ名です。デフォルト値は「CPSCUser」です。
[パスワード (Password)]	データベース ユーザ名のパスワードを入力します。	データベース ユーザ名のパスワードを入力します。

手順 8 [次へ (Next)] をクリックして、ウィザードの次のページに進みます。

インストーラにより、入力された設定値に基づく Service Catalog データベースに対する接続テストと、データベース プラットフォームに関する前提条件が満たされているかどうかのチェックが行われます。

データベース接続テストが失敗した場合、[データベーステスト接続が失敗しました (Database Test Connection Failed)] というダイアログ ボックス メッセージが表示されます。このメッセージが表示された場合は、[OK] をクリックしてダイアログ ボックスを閉じ、[Service Catalog データベース (Service Catalog Database)] パネルで情報に必要な修正を加えます。この時点でインストーラ ウィザードを中止する場合は、[キャンセル (Cancel)] をクリックします。

データベース接続テストが正常に完了した場合、[マスターキーファイル (Master Key File)] パネルが表示されます。

手順 9 [マスターキーファイル (Master Key File)] パネルに、以前に C:\Temp にコピーした kek_new.txt ファイルのフルパスを入力(または参照)します。

手順 10 [次へ (Next)] をクリックします。

Prime Service Catalog インストーラにより、指定された kek_new.txt ファイルのマスター キーが、最後のパネルで入力した Service Catalog データベースと一致することが確認されます。マスター キー ファイルが一致しない場合、エラーが発生し、インストーラは次のステップに進むことができません。

手順 11 [DataMart データベースの作成 (DataMart Database Creation)] パネルで、次の操作を実行します。

- データベースを既に作成している場合は、[いいえ (No)] を選択し、[次へ (Next)] をクリックして続行します。既存のデータベースの情報を入力するよう求められます。[Reporting 向け Data Mart データベース テーブル](#)を参照して、データベース情報を入力してください。
- データベースを事前に作成していない場合は、インストーラによりデータベースを自動的に作成するため [はい (Yes)] を選択し、[次へ (Next)] をクリックします。インストーラがその場でデータベースを作成できるように、データベース サーバへの接続情報を入力するよう求められます。[Data Mart データベース (Data Mart Database)] パネルにデータベース情報を入力し、[Datamart の作成 (Create Datamart)] をクリックします。

データベースが正常に作成されると、Data Mart データベースの作成が正常に完了したことを示すメッセージダイアログが表示されます。[OK] をクリックしてメッセージダイアログボックスを閉じます。次の [Reporting 向け Data Mart データベース テーブル](#)を参照して、データベース情報を入力してください。



(注) この「Datamart の作成」機能により、Service Catalog Reporting モジュールが機能するために必要な最小限の要件に対応した、非常に基本的な Data Mart データベースが作成されます。デモ システムまたはテスト システムではこの機能を使用することが推奨されますが、本番システムではデータベース管理者と協力し、データベースの構成に関する項で説明するすべての製品要件と、企業ポリシーに準拠したパフォーマンス、信頼性、およびセキュリティの要件に対応した Data Mart データベースを作成することが推奨されます。

- アップグレードインストールを実行する場合は [いいえ (No)] を選択し、[次へ (Next)] をクリックします。既存の Data Mart データベースの情報を入力するよう求められます。「Reporting 向け Data Mart データベース テーブル」を参照して、データベース情報を入力します。詳細については、[第 6 章「Prime Service Catalog のアップグレード」](#)を参照してください。



(注) [Data Mart データベース (Data Mart Database)] パネルのフィールドは、[Data Mart データベースの作成 (Data Mart Database Creation)] パネルで [はい (Yes)] と [いいえ (No)] のいずれをクリックしたかによって異なります。それぞれに応じて [表 7-2](#) を使用します。

表 7-2 Reporting 向け Data Mart データベース テーブル

フィールド	SQL Server	Oracle サーバ
[ホスト IP アドレス (Host IP Address)]	データベース サーバの IP アドレスを入力します。	データベース サーバの IP アドレスを入力します。 Oracle RAC を使用する場合は、SCAN IP アドレスのみを使用します。
[ポート (Port)]	データベース サーバが使用する TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1433 です。	データベース サーバが使用する TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1521 です。
[データベース名 (Database name)]	Data Mart データベースの名前を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。デフォルト値は「Datamart」です。	N/A

表 7-2 Reporting 向け Data Mart データベース テーブル(続き)

フィールド	SQL Server	Oracle サーバ
[sa パスワード(sa password)]	SQL Server でデータベースを作成するには、インストーラが「sa」ユーザとして SQL Server に接続する必要があります。「sa」ユーザのパスワードを入力します。	N/A
[sys パスワード(sys password)]	N/A	「sys」ユーザのパスワードを入力します。
[データベース SID またはデータベースサービス名(Database SID or Database Service Name)]	N/A	Oracle データベースへの接続に SID を使用する場合は、[SID] オプション ボタンを選択し、Oracle SID の値を入力します。Oracle データベースへの接続にサービス名を使用する場合は、[サービス名(Service Name)] オプション ボタンを選択し、サービス名の値を入力します。 Oracle RAC を使用する場合は、サービス名のみを使用します。
[ユーザ名(Username)]	データベース ユーザ名を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。 このユーザ名は、ログイン ID と「Datamart」データベースの db_owner です。デフォルト値は「DMUser」です。	データベース ユーザ名を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。 このユーザ名は、データベーススキーマのログイン ID とスキーマ名です。デフォルト値は「DMUSER」です。
[パスワード(Password)]	データベース ユーザ名のパスワードを入力します。	データベース ユーザ名のパスワードを入力します。
[パスワードの確認(Confirm Password)]	データベース ユーザ名のパスワードをもう一度入力します。	データベース ユーザ名のパスワードをもう一度入力します。
[ユーザテーブルスペース(User tablespace)]	N/A	(オプション値)特定の Oracle テーブルスペース名がある場合、ここにその名前を入力します。スキーマのデフォルトのテーブルスペース名はこの値に設定されます。 この値を空白にすると、インストーラは Oracle Server によって提供されるデフォルト USER テーブルスペースを使用します。
[一時テーブルスペース(Temp tablespace)]	N/A	(オプション値)特定の Oracle 一時テーブルスペース名がある場合、ここにその名前を入力します。スキーマの一時テーブルスペース名はこの値に設定されます。この値を空白にすると、インストーラは Oracle Server によって提供されるデフォルト TEMP テーブルスペースを使用します。

手順 12 [Data Mart データベース (Data Mart Database)] パネルで [次へ (Next)] ボタンをクリックして続行します。インストーラがデータベースに接続し、データベースの必須設定が検証されます。インストーラによってデータベースが作成される場合、このデータベースはすべての必須設定に対応しており、検証テストは成功します。既存のデータベースの情報を入力した場合、特定の必須データベース設定が欠落していることが検出されると、検証エラーがインストーラから報告されます。データベース検証エラーが発生した場合でも、インストーラでは次の操作に移動できます。次のいずれかを実行できます。

- a. エラー ダイアログを閉じ、[キャンセル (Cancel)] をクリックしてインストール ウィザードを終了する。
- b. 個々のデータベース接続セッションで欠落しているデータベース設定を修正する。その後、この画面に戻り、エラー ダイアログを閉じて [次へ (Next)] をもう一度クリックします。この時点でインストーラは検証テストを繰り返し、テストが成功すると次のページに進むことができます。

データベースの検証が成功すると、[Content Store データベースの作成 (Content Store Database Creation)] パネルが表示されます。

手順 13 新規インストールの場合は、[Cognos データベース サーバの要件](#)で説明されているように、データベースを事前に準備できます。

- データベースを既に作成している場合は、[いいえ (No)] を選択し、[次へ (Next)] をクリックして続行します。既存のデータベースの情報を入力するよう求められます。

次の「[Reporting 向け Content Store データベース テーブル](#)」を参照して、データベース情報を入力します。[次へ (Next)] をクリックします。

- データベースを事前に作成していない場合は、インストーラによりデータベースを自動的に作成するため [はい (Yes)] を選択し、[次へ (Next)] をクリックします。インストーラがその場でデータベースを作成できるように、データベース サーバへの接続情報を入力するよう求められます。[Content Store データベースの作成 (Content Store Database Creation)] パネルにデータベース情報を入力し、[Content Store の作成 (Create Content Store)] をクリックします。データベースが正常に作成されると、Content Store データベースの作成が正常に完了したことを示すメッセージ ダイアログが表示されます。



(注)

データベース作成機能により、Service Catalog Reporting モジュールが機能するために必要な最小限の要件に対応した、非常に基本的な Content Store データベースが作成されます。デモ システムまたはテスト システムではこの機能を使用することが推奨されますが、本番システムではデータベース管理者と協力し、「[Cognos データベース サーバの要件](#)」の項で説明するすべての製品要件と、企業ポリシーに準拠したパフォーマンス、信頼性、およびセキュリティの要件に対応した Content Store データベースを作成することが推奨されます。

- アップグレード インストールを実行する場合は [いいえ (No)] を選択し、[次へ (Next)] をクリックします。既存の Content Store データベースの情報を入力するよう求められます。詳細については、[第 6 章「Prime Service Catalog のアップグレード」](#)を参照してください。

次の表 7-3 を参照して、データベース情報を入力してください。[次へ (Next)] をクリックします。


(注)

[Content Store データベース (Content Store Database)] パネルのフィールドは、[Content Store データベースの作成 (Content Store Database Creation)] パネルで [はい (Yes)] と [いいえ (No)] のいずれをクリックしたかによって異なります。それぞれに応じて、「Reporting 向け Content Store データベース テーブル」を使用します。

表 7-3 Reporting 向け Content Store データベース テーブル

フィールド	SQL Server	Oracle サーバ
[ホスト IP アドレス (Host IP Address)]	データベース サーバの IP アドレスを入力します。	データベース サーバの IP アドレスを入力します。 Oracle RAC を使用する場合は、SCAN IP アドレスのみを使用します。
[ポート (Port)]	データベース サーバが使用する TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1433 です。	データベース サーバが使用する TCP/IP ポート番号を入力します。デフォルト値は 1521 です。
[データベース名 (Database name)]	Content Store データベースの名前を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。デフォルト値は「ContentStore」です。	N/A
[sa パスワード (sa password)]	SQL Server でデータベースを作成するには、インストーラが「sa」ユーザとして SQL Server に接続する必要があります。「sa」ユーザのパスワードを入力します。	N/A
[データベース SID またはデータベースサービス名 (Database SID or Database Service Name)]	N/A	Oracle データベースへの接続に SID を使用する場合は、[SID] オプション ボタンを選択し、Oracle SID の値を入力します。Oracle データベースへの接続にサービス名を使用する場合は、[サービス名 (Service Name)] オプション ボタンを選択し、サービス名の値を入力します。 Oracle RAC を使用する場合は、サービス名のみを使用します。
[ユーザ名 (Username)]	データベース ユーザ名を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。 このユーザ名は、ログイン ID と「ContentStore」データベースの db_owner です。デフォルト値は「CSUser」です。	データベース ユーザ名を入力します。英数字だけを入力します。空白文字は使用しないでください。 このユーザ名は、データベーススキーマのログイン ID とスキーマ名です。デフォルト値は「CSUSER」です。
[パスワード (Password)]	データベース ユーザ名のパスワードを入力します。	データベース ユーザ名のパスワードを入力します。
[パスワードの確認 (Confirm Password)]	データベース ユーザ名のパスワードをもう一度入力します。	データベース ユーザ名のパスワードをもう一度入力します。

表 7-3 Reporting 向け Content Store データベース テーブル(続き)

フィールド	SQL Server	Oracle サーバ
[ユーザテーブルスペース (User tablespace)]	N/A	(オプション値) 特定の Oracle テーブルスペース名がある場合、ここにその名前を入力します。スキーマのデフォルトのテーブルスペース名はこの値に設定されます。 この値を空白にすると、インストーラは Oracle Server によって提供されるデフォルト USER テーブルスペースを使用します。
[一時テーブルスペース (Temp tablespace)]	N/A	(オプション値) 特定の Oracle 一時テーブルスペース名がある場合、ここにその名前を入力します。スキーマの一時テーブルスペース名はこの値に設定されます。この値を空白にすると、インストーラは Oracle Server によって提供されるデフォルト TEMP テーブルスペースを使用します。

手順 14 [Content Store データベース (Content Store Database)] パネルで [次へ (Next)] ボタンをクリックし、続行します。インストーラがデータベースに接続し、データベースの必須設定が検証されます。インストーラによってデータベースが作成される場合、このデータベースはすべての必須設定に対応しており、検証テストは成功します。既存のデータベースの情報を入力した場合、特定の必須データベース設定が欠落していることが検出されると、検証エラーがインストーラから報告されます。データベース検証エラーが発生した場合でも、インストーラでは次の操作に移動できます。次のいずれかを実行できます。

- エラーダイアログを閉じ、[キャンセル (Cancel)] をクリックしてインストール ウィザードを終了する。
- 個々のデータベース接続セッションで欠落しているデータベース設定を修正する。その後、この画面に戻り、エラーダイアログを閉じて [次へ (Next)] をもう一度クリックします。この時点でインストーラは検証テストを繰り返し、テストが成功すると次のページに進むことができます。

データベースの検証が成功すると、[Content Store ルートディレクトリ (Content Store Root Directory)] ページが表示されます。

手順 15 [次へ (Next)] をクリックして続行します。[Cognos 設定 (Cognos Settings)] ページが表示されます。

手順 16 Cognos サーバに関する次の情報を入力します。

- [Cognos サーバ名 (Cognos Server Name)]: Cognos ソフトウェアがインストールされているコンピュータの (IP アドレスではなく) 完全修飾ドメイン ホスト名を入力します。
- [IIS を設定する (Configure IIS?)]: このオプションを選択解除しないでください。インストーラにより、このコンピュータの IIS Web サーバで Cognos アプリケーションが自動的に設定されます。
- [IIS Web サイト (IIS Web Site)]: デフォルト値「Default Web Site」を変更しないでください。

手順 17 [詳細オプション(Advanced Options)] ボタンをクリックします。[詳細オプション(Advanced Options)] ダイアログ ボックスが表示されます。

インストール中にデータベース スクリプトを実行するように指定する場合は、[SQL スクリプトを実行する(Execute SQL Scripts)] チェック ボックスをオンにします。このチェック ボックスは、デフォルトでオンになっています。

次のような例外的な状況でのみこの設定をオフにします。

- スクリプトの実行前に、社内担当者によるスクリプトの個別レビューが必要な場合。この場合、スクリプトを実行してインストールを完了するためには、このウィザードを最初から実行し直してこのチェック ボックスをオンにする必要があります。
- 過去のインストールでこれらのスクリプトが正常に実行されたが、その後インストール実行中に失敗した場合。この場合は、過去に実行されたことのあるスクリプトは再度実行する必要がないため、このチェック ボックスをオフにすることで、2 回目以降のインストール作業に要する時間を、スクリプトの実行時間だけ短縮することができます。

手順 18 [次へ(Next)] をクリックして続行します。

[Form Data Reporting] パネルが表示されます。

手順 19 [Form Data Reporting のテーブル(Form Data Reporting Tables)] に示すように、[Form Data Reporting のテーブル(Form Data Reporting Tables)] の各設定項目に値を入力します。インストール完了後にこれらの設定内容を変更する必要がある場合のために、利用できるユーティリティが用意されています。詳細については、『Cisco Prime Service Catalog Reporting Guide』の「Modifying Form Data Reporting Configuration」の項を参照してください。

表 7-4 [Form Data Reporting のテーブル(Form Data Reporting Tables)]

フィールド	定義
[ディクショナリテーブルのプレフィックス(Dictionary table prefix)]	ディクショナリ テーブル名のプレフィックス。デフォルト値は「DM_FDR_DICTIONARY_」です。このプレフィックスを使用することをお勧めします。 プレフィックスを変更する必要がある場合は、英字とアンダースコア文字のみを使用してください。数字や特殊文字は使用しないでください。
[サービステーブルのプレフィックス(Service table prefix)]	サービス テーブル名のプレフィックス。デフォルト値は「DM_FDR_SERVICE_」です。このプレフィックスを使用することをお勧めします。プレフィックスを変更する必要がある場合は、英字とアンダースコア文字のみを使用してください。数字や特殊文字は使用しないでください。
[テーブル列のプレフィックス(Table columns prefix)]	各テーブルのフィールド名のプレフィックス。デフォルト値は「FIELD」です。 デフォルト値をどうしても変更する必要がある場合を除き、このデフォルト値を使用することを推奨します。この名前を使用して作成されるテーブルには、FIELD1、FIELD2、...、FIELDn などの名前のフィールドが含まれます。
[テキスト列の最大長(Text column max length)]	このパラメータは、ディクショナリおよびサービス テーブル オブジェクトの varchar フィールドの最大サイズを示します。デフォルト値は 200 です。

手順 20 [次へ(Next)] をクリックして続行します。[Form Data Reporting ディクショナリ設定(Form Data Reporting Dictionary Settings)] パネルが表示されます。

- 手順 21 [\[Form Data Reporting デictionary 設定 \(Form Data Reporting Dictionary Settings\)\]](#) の表に示すように、[\[Form Data Reporting デictionary 設定 \(Form Data Reporting Dictionary Settings\)\]](#) の各設定項目に値を入力します。

表 7-5 [\[Form Data Reporting デictionary 設定 \(Form Data Reporting Dictionary Settings\)\]](#) の表

フィールド	定義
[Dictionary tables]	Data Mart データベースでレポート可能な Dictionary のデータを格納するために必要なテーブルの数。レポート可能な Dictionary ごとに 1 つのテーブルが必要です。デフォルト値は最小値の 50 です。
[Text Fields]	顧客フォーム レポート分析に基づいて Dictionary で使用されるテキスト型フィールドの数。デフォルト値は 40 です。
[Numeric fields]	顧客フォーム レポート分析に基づいて Dictionary で使用される数値フィールドの数。デフォルト値は 10 です。
[Date fields]	顧客フォーム レポート分析に基づいて Dictionary で使用される日付フィールドの数。デフォルト値は 10 です。

- 手順 22 [次へ (Next)] をクリックして続行します。[\[Form Data Reporting サービス設定 \(Form Data Reporting Service Settings\)\]](#) ページが表示されます。
- 手順 23 [\[Form Data Reporting サービス設定 \(Form Data Reporting Service Settings\)\]](#) の表に示すように、[\[Form Data Reporting サービス設定 \(Form Data Reporting Service Settings\)\]](#) の各設定項目に値を入力します。

表 7-6 [\[Form Data Reporting サービス設定 \(Form Data Reporting Service Settings\)\]](#) の表

フィールド	定義
[Service tables]	Data Mart データベースでレポート可能な Dictionary のデータを格納するために必要なテーブルの数。レポート可能な Dictionary ごとに 1 つのテーブルが必要です。デフォルト値は最小値の 50 です。
[Text Fields]	顧客フォーム レポート分析に基づいて Dictionary で使用されるテキスト型フィールドの数。デフォルト値は 80 です。
[Numeric fields]	顧客フォーム レポート分析に基づいて Dictionary で使用される数値フィールドの数。デフォルト値は 20 です。
[Date fields]	顧客フォーム レポート分析に基づいて Dictionary で使用される日付フィールドの数。デフォルト値は 20 です。

- 手順 24 [次へ (Next)] をクリックします。[\[SMTP 設定 \(SMTP Settings\)\]](#) パネルが表示されます。
- 手順 25 [\[Form Data Reporting サービス設定 \(Form Data Reporting Service Settings\)\]](#) の表に示すように、SMTP 設定値を入力します。

表 7-7 [SMTP 設定 (SMTP Settings)] の表

フィールド	定義
SMTP ホスト名	SMTP サーバのホスト名または IP アドレス。
[SMTP ポート (SMTP Port)]	SMTP サーバが使用する SMTP ポート番号。有効なポート番号は 1 ~ 65535 です。デフォルト値は 25 です。
[SMTP ユーザ名 (SMTP username)]	(オプション) SMTP サーバの認証ユーザ。
[SMTP パスワード (SMTP Password)]	(オプション) SMTP ユーザ名のパスワード。
[送信元の電子メール (Sender email)]	システムが生成する通知に使用される送信元のメールアドレス。

- 手順 26 (オプション) SMTP サーバへの接続を確認するには、[SMTP のテスト (Test SMTP)] ボタンをクリックします。テスト接続が失敗しても、インストーラは次のページに進むことができます。
- 手順 27 [次へ (Next)] をクリックして続行します。[インストール前の要約 (Pre-Installation Summary)] パネルが表示されます。
- インストールを開始するのに必要な情報がインストール ウィザードに入力されました。このパネルに表示される設定内容を確認してください。変更が必要な場合は、[戻る (Previous)] をクリックして特定のパネルに戻り、必要な変更を行ってください。設定内容が正しければ、[インストール (Install)] をクリックして Reporting のインストールを開始します。
- インストールが完了するまでには最大 20 分かかります。このプロセスの実行中にインストール ウィザードを中止することは避けてください。インストール プロセスが正常に完了すると、インストール ウィザードの [インストールが完了しました (Install Complete)] パネルが表示されます。
- 手順 28 [完了 (Done)] をクリックして、インストール ウィザードを終了します。

create_datasource.cmd の実行

create_datasource.cmd を実行するには、次の手順を実行します。

- 手順 1 コマンドプロンプト ウィンドウを開き、<Reporting_Install_Dir>\cognos\bin ディレクトリに移動します。
- 手順 2 create_datasource.cmd を実行します。
- 手順 3 create_datasource.cmd が正常に完了したら、Cognos マシンでブラウザを開いて、URL **http://localhost/cognos10** に接続します。
- 手順 4 サービス カタログ (Service Catalog) サイト管理者ユーザのユーザ ID およびパスワードを入力し、[OK] をクリックしてログインします。
- 手順 5 UI で [マイホーム (My home)] リンクをクリックします。
- 手順 6 UI の右上隅にある [起動 (Launch)] リンクをクリックし、[IBM Cognos の管理 (IBM Cognos Administration)] ドロップダウンメニューをクリックします。
- 手順 7 [設定 (Configuration)] タブをクリックします。
- 手順 8 左側のペインで、[データソース接続 (Data Source Connections)] リンクをクリックします。

- 手順 9 右側のペインで、「RequestCenter」をクリックします。
- 手順 10 データベースが SQL Server の場合はこのステップをスキップしてください。データベースが Oracle の場合は、以下に示すステップ a から f に従い JDBC 接続パラメータを変更してください。
- 次に示す [アクション (Actions)] 列の [プロパティの設定 - RequestCenter (Set properties - RequestCenter)] アイコンをクリックします。

図 7-5 【プロパティの設定 - RequestCenter (Set properties - RequestCenter)】



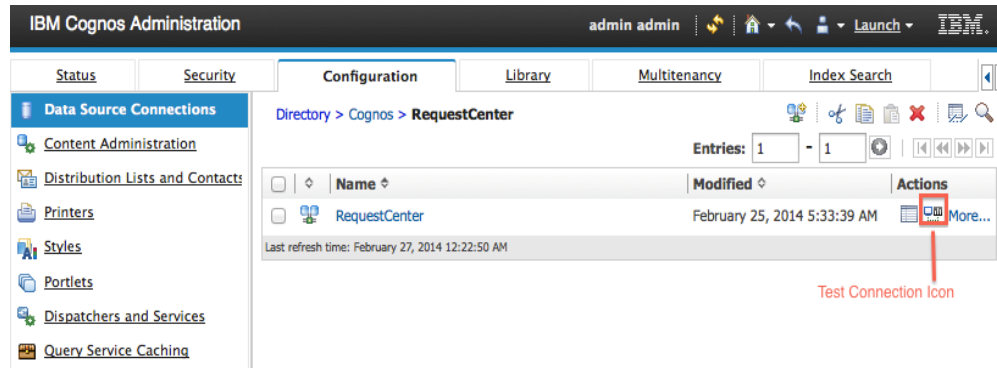
- [接続 (Connection)] タブをクリックして、[接続文字列 (Connection string)] テキスト ボックスの横に表示される [接続文字列の編集 (Edit connection string)] アイコンをクリックします。
- [OCI] タブの [SQL*Net 接続文字列 (SQL*Net connect string)] テキスト ボックスの値をコピーします。
- [JDBC] タブを開き、ドライバタイプの [シン (Thin)] オプション ボタンを選択し、次に示す [Oracle Net ディスクリプタ (Oracle Net Descriptor)] テキスト ボックスに、前のステップでコピーした接続文字列を貼り付けます。

図 7-6 【ドライバタイプの選択 (Driver Type Selection)】 ウィンドウ



- [OK] ボタンをクリックして、変更内容を保存します。
 - [OK] ボタンをもう一度クリックして [プロパティの設定 - RequestCenter (Set properties - RequestCenter)] ページを閉じます。
- 手順 11 このステップは SQL Server および Oracle のどちらの場合でも実行します。RequestCenter の [アクション (Actions)] 列の下の [接続をテスト (Test the connection)] アイコンをクリックします。

図 7-7 [接続をテスト (Test the Connection)] ウィンドウ



3.625.98

手順 12 次のページで [テスト (Test)] ボタンをクリックします。

手順 13 この画面で両方の JDBC エントリのステータスが [成功 (Succeeded)] であることを確認します。これで、次の項に進むことができます。

サービス カタログ (Service Catalog) レポートのインポート

サービス カタログ (Service Catalog) 標準レポート アーカイブを設定し、Cognos 環境にインポートするには、次の作業を行います。

- 手順 1 コマンドプロンプト ウィンドウを開き、`<Reporting_Install_Dir>\cognos\bin` ディレクトリに移動します。
- 手順 2 `import_reports.cmd` を実行します。
- 手順 3 `update_datamart_std.cmd` を実行します。



(注) このスクリプトの実行には数分かかることがあります。

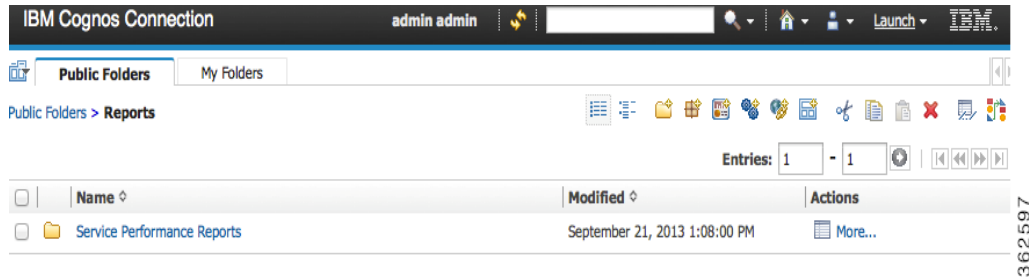
サービス カタログ (Service Catalog) アプリケーションの再起動

Service Catalog アプリケーションを再起動するには、次の手順を実行します。

- 手順 1 サービス カタログ (Service Catalog) アプリケーションを再起動します。これにより、サービス カタログ (Service Catalog) アプリケーション サーバは、Cognos アプリケーション サーバとの統合を可能にする新しい設定を選択できるようになります。Request Center アプリケーションが実行されているアプリケーション サーバ全体を再起動します。
- 手順 2 アプリケーション サーバが起動したら、IP アドレス (`http://IP Address/RequestCenter` など) を使用して URL に接続します。サイト管理者ユーザとしてログインします。
- 手順 3 Reporting モジュールを選択します。
- 手順 4 [レポート (Reports)] タブをクリックします。

- 手順 5 [共有フォルダー (Public Folders)] タブが表示され、このタブに「Service Performance Reports」という名前のフォルダが表示されていることを確認します。表示されている場合、サービス カタログ (Service Catalog) の Reporting モジュールが Cognos アプリケーション サーバと正常に統合されています。

図 7-8 [レポート (Report)] タブ



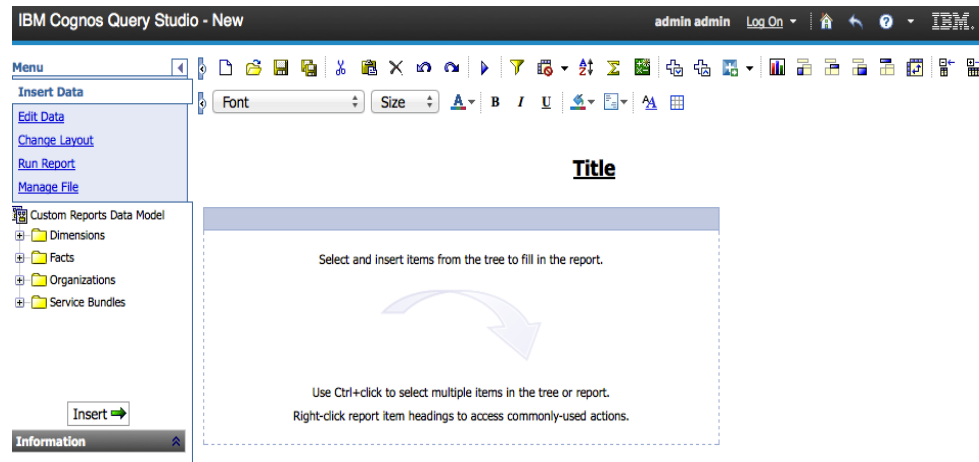
- 手順 6 「Advanced Reporting の設定」に進みます。

Advanced Reporting の設定

次のスクリプトを実行して、Advanced Reporting コンポーネントを設定します。Advanced Reporting を設定しない場合は、[インストール後の作業](#)に進みます。

- 手順 1 Cognos マシン上でコマンドプロンプト ウィンドウを開き、`<Reporting_Install_Dir>\cognos\bin` ディレクトリに移動します。
- 手順 2 `update_datamart.cmd` を実行します。このスクリプトの実行には数分かかることがあります。
- 手順 3 `create_model.cmd` を実行します。
- 手順 4 `publish_fdr_pkg.cmd` を実行します。このスクリプトの実行には数分かかることがあります。
- 手順 5 Service Catalog UI からログアウトし、サイト管理者ユーザとして再度ログインします。URL に IP アドレスを使用する必要がある (`http://"IP Address"/RequestCenter` など) ことに注意してください。
- 手順 6 **Advanced Reporting** モジュールを選択します。
- 手順 7 [アドホックレポート (Ad-Hoc Reports)] タブをクリックします。
- 手順 8 [カスタムレポートデータモデル (Custom Report Data Models)] リンクをクリックします。
- 手順 9 [Query Studio] ウィンドウが表示される場合は、サービス カタログ (Service Catalog) の Advanced Reporting モジュールが Cognos アプリケーション サーバと正常に統合されています。

図 7-9 [Query Studio] ウィンドウ



362590

インストール後の作業

インストール後には、ETL プロセス実行をスケジュールします。各プロセスにかかる時間は、抽出して Data Mart データベースに送信する必要がある Request Center データベースのデータ量に比例します。

Reporting のインストール後の作業

Cognos マシンで次のスクリプトをスケジュール タスクとして設定します。スクリプトはすべて <Reporting_Install_Dir>\cognos\bin ディレクトリにあります。

標準レポート用スクリプト	説明
update_datamart_std.cmd	このスクリプトは、データを Service Catalog データベースから抽出して、Data Mart データベースに送信します。このデータは、サービス カタログ (Service Catalog) 標準レポートを更新するために使用されます。このスクリプトは、標準レポートの更新頻度に関係なくスケジュールできます。通常、1 日 1 回、オフピーク時に実行されるようにスケジュールできます。

Advanced Reporting のインストール後の作業

Advanced Reporting を使用する場合、この項で説明されている作業も行う必要があります。

- 手順 1 Cognos マシンで、次のスクリプトをスケジュール タスクとして設定します。スクリプトはすべて `<Reporting_Install_Dir>\cognos\bin` ディレクトリにあります。

詳細レポート用スクリプト	説明
<code>update_datamart.cmd</code>	Data Mart データベースのファクト テーブルおよびディメンションを更新します。
<code>create_model.cmd</code>	Cognos レポーティング ツール (Query Studio および Report Studio) により使用されるフレームワーク モデルを作成します。
<code>publish_fdr_pkg.cmd</code>	このスクリプトは、サービス カタログ (Service Catalog) の Cognos フレームワークをパブリッシュします。



(注)

上の表に記載されている詳細レポート スクリプトは、1 日 1 回オフピーク時に実行されるようスケジュールすることをお勧めします。Data Mart データベースのデータは、このプロセスの実行中でも使用できますが、パフォーマンスが低下する可能性があります。

`update_datamart.cmd` および `create_model.cmd` 間での新しいまたは変更要求は、10,000 件あたり 40 分かかります。`create_model.cmd` および `publish_fdr_pkg.cmd` 間での新しいまたは変更要求は、10,000 件あたり 30 分かかります。

スクリプトは重複なしで実行する必要があります。これらのスクリプトを同時に実行すると、データ競合が発生します。

Oracle RAC データベースでの Reporting モジュールの使用

Reporting モジュールを Oracle RAC データベースとともにインストールする場合は、データベースに接続するためにインストール ウィザードで Oracle サービス名と SCAN ホストの IP アドレスを入力します。インストール後に、次の手順に従って SCAN ホストの IP アドレスを SCAN 名に置き換えます。これらの手順は、Reporting 設定スクリプトの実行を開始する前に実行してください。

- 手順 1 SCAN 名とそのマッピングされた一連の IP アドレスをマシンの `hosts` ファイルに追加します。
- 手順 2 IBM Cognos サービスを停止します。
- 手順 3 `<Reporting Install folder>` ディレクトリと `<Cognos Install Folder>\c10_64` ディレクトリにあるすべてのファイルで、SCAN ホストの IP アドレスを SCAN 名に置き換えます。これには、`grepWin` などのサードパーティ製ソフトウェアを使用してそれらのディレクトリ内にある SCAN ホストの IP アドレスを含むファイルを検索し、テキスト エディタを使用してそれらのファイルを修正することをお勧めします。

手順 4 次のディレクトリにある ojdbc6.jar ファイルを ojdbc7.jar ファイル (Oracle 12c JDBC ドライバ) で上書きします。

```
<Reporting Install folder>\cognos\lib
```

```
<Cognos Install Folder>\c10_64\webapps\p2pd\WEB-INF\lib
```

手順 5 <Reporting Install folder>\cognos\bin ディレクトリにあるすべてのスクリプトで、「%JAVA_HOME%\bin\java」という文字列を「%JAVA_HOME%\bin\java -Doracle.jdbc.autoCommitSpecCompliant=false」という文字列に置き換えます。これには、grepWin などのサードパーティ製ソフトウェアを使用してそれらのディレクトリ内にある「JAVA_HOME」という文字列を含むファイルを検索し、テキスト エディタを使用してそれらのファイルを修正することをお勧めします。



(注) 「%JAVA_HOME%\bin\java.exe」のような文字列は置き換えないでください。

手順 6 テキスト エディタを使用して、「update_datamart_std.cmd」スクリプト内の「%DEBUG_OPTS%」という文字列を削除します。

手順 7 IBM Cognos サービスを起動します。

Reporting のアップグレード

Reporting のアップグレード前の作業の実行

Data Mart および Content Store のアーティファクトのバックアップ

Data Mart および Content Store のアーティファクトをバックアップするには、次の手順を実行します。

手順 1 Data Mart データベース (カスタム Data Mart テーブルがある場合、このバックアップから参照できます) および Content Store データベースをバックアップします。

手順 2 Service Catalog データベースから、Advanced Reporting により使用されるすべてのカスタム定義ビューをバックアップします。

手順 3 Service Catalog データベースから、Advanced Reporting により使用されるすべてのカスタム定義ビューのバックアップをエクスポートします。

Cognos 8.4.x コンポーネントのアンインストール

このリリースの Service Catalog は Cognos バージョン 10.2.1 を使用します。新しいマシンに Cognos 10.2.1 ソフトウェアをインストールできます。ただし、すでに Cognos 8.4.x ソフトウェアがインストールされているマシンに Cognos 10.2.1 ソフトウェアをインストールする予定の場合は、次の手順を実行して、最初に Cognos 8.4.x ソフトウェアをアンインストールする必要があります。

-
- 手順 1 システムの [スタート(Start)] ボタンから、[プログラム(Programs)] > [IBM Cognos 8] > [IBM Cognos 8 をアンインストール(Uninstall IBM Cognos 8)] を選択します。
 - 手順 2 表示言語を選択して、[次へ(Next)] をクリックします。
 - 手順 3 パッケージリストからすべてのコンポーネントを選択して、[完了(Finish)] 画面が表示されるまで、インストール ウィザードを進めます。
 - 手順 4 すべてのコンポーネントが正常にアンインストールされたら、システムをリブートします。
-

Cognos 10.2.1 ソフトウェアのインストール

Cognos 10.2.1 のインストール方法の詳細については、[Cognos ソフトウェアのインストール](#)を参照してください。

Reporting インストーラによるアップグレード

Reporting インストーラを実行してアップグレードを行うには、次の手順を実行します。

-
- 手順 1 [Reporting のインストール](#)の説明に従い、Reporting インストール ウィザードを実行します。
 - 手順 2 Data Mart データベースに関する設定値を入力したら、[次へ(Next)] をクリックして、ウィザードの次のページへ進みます。
[既存のインストールが検出されました(Existing Installation Detected)] ダイアログ ボックスが表示されます
 - 手順 3 [既存のデータベースをアップグレード(Upgrade Existing Database)] をクリックします。
 - 手順 4 [Reporting インストール ウィザードの実行](#)の説明に従って、Reporting インストール ウィザードを続行します。[Form Data Reporting のテーブル(Form Data Reporting Tables)]、[Form Data Reporting デクショナリ設定(Form Data Reporting Dictionary Settings)]、および [Form Data Reporting サービス設定(Form Data Reporting Service Settings)] の各ページで設定の編集を行うことはできません。これらのページでは、単に [次へ(Next)] をクリックしてウィザードを続行します。アップグレード完了後にこれらの設定内容を変更する必要がある場合のために、利用できるユーティリティが用意されています。詳細については、『[Cisco Prime Service Catalog Reporting Guide](#)』の「Modifying Form Data Reporting Configuration」の項を参照してください。
-

Advanced Reporting のアップグレード後の作業の実行

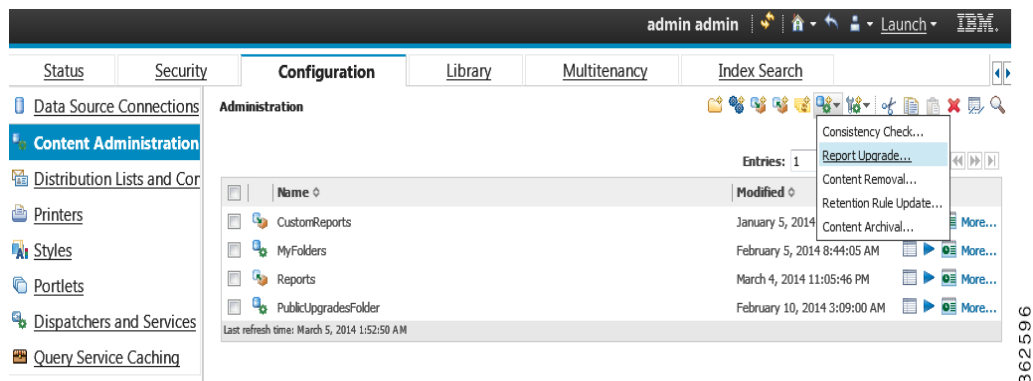
[インストール後の作業](#)で説明されている作業を行います。

カスタム レポートの移行

Cognos 10.1 へのアップグレード時に、カスタム レポートは自動的にアップグレードされます。必要に応じて、Prime Service Catalog からレポートを手動でアップグレードできます。

- 手順 1 レポート管理者ロールが付与されているユーザとして Service Catalog にログインします。
- 手順 2 ドロップダウンから **Advanced Reporting** モジュールを選択します。
- 手順 3 右上隅の [起動(Launch)] に移動し、[IBM Cognos Administration] をクリックします。
- 手順 4 [設定(Configuration)] タブをクリックします。
- 手順 5 左側のペインで [コンテンツ管理(Content Administration)] に移動し、[コンテンツ保守を新規作成(New Content Maintenance)] アイコンをクリックし、次に示すように [レポートのアップグレード(Report Upgrade)] を選択します。

図 7-10 【コンテンツ管理(Content Administration)】ウィンドウ



- 手順 6 [コンテンツ保守を新規作成(New Content Maintenance)] のタスクの [名前(Name)]、[説明(Description)] (オプション)、および [画面のヒント(Screen Tips)] (オプション) を入力します。次に、[次へ(Next)] をクリックします。
- 手順 7 [レポートのアップグレード(Report upgrade)] 画面で [追加(Add)] をクリックします。アップグレードする必要があるフォルダを選択し、[追加(Add)] をクリックし、下部にある [OK] をクリックします。
- 手順 8 [次へ(Next)] をクリックします。
- 手順 9 次のいずれかのアクションを選択します。
- [保存して 1 回実行(Save and run once)]
 - [保存してスケジュール(Save and schedule)]
 - [保存のみ(Save only)]
- 手順 10 [終了(Finish)] をクリックします。
- 手順 11 レポートのアップグレードを実行する時間を選択し、[OK] をクリックします。
- 手順 12 ジョブの結果を表示するには、[ダイアログを閉じた後にこのコンテンツ保守タスクの詳細を表示する(View the details of this content maintenance task after closing the dialog)] チェック ボックスをオンにします。
- 手順 13 [OK] をクリックします。
- 手順 14 [リフレッシュ(Refresh)] をクリックすると、ステータスが表示されます。[閉じる(Close)] をクリックします。

レポートのアップグレードに関する問題と解決策

10.0 および 10.0-R2 を除く古いリリースから 10.1 にアップグレードすると、Reports の [権限 (Permission)] タブで一部のロールが [使用不可 (Unavailable)] と表示されます。これは、10.1 でそのロールが廃止または名前が変更された場合に発生します。この変更は、レポート機能には影響しませんが、ユーザが混乱する可能性があります。これを回避するには、ロール名が変更されている場合は該当するロールを削除してから、再び追加します。

ロールを削除してから追加するには、次の手順を実行します。

-
- 手順 1 Service Catalog UI にログインし、**Advanced Reporting** モジュールに移動します。
 - 手順 2 フォルダ名の下のカスタム レポートに移動します。
 - 手順 3 カスタム レポートの [操作 (Actions)] 列の下に [詳細 (More)] をクリックします。
 - 手順 4 [実行できる操作 (Available actions)] の下に [プロパティを設定 (Set properties)] をクリックします。
 - 手順 5 [権限 (Permissions)] タブをクリックします。ロールが廃止または名前が変更されている場合、そのロールは [使用不可 (Unavailable)] として表示されます。これらのロールが今後不要である場合はロールを削除できます。また、このリリースで使用可能な新しいロールのリストに基づいて適切なロール名に変更することができます。
 - 手順 6 ロールを削除するには、[使用不可 (Unavailable)] として表示されるロールの前にあるチェックボックスをオンにし、テーブル下部の [削除 (Remove)] リンクをクリックします。
 - 手順 7 新しいロールを追加するには、テーブル下部にある [追加 (Add)] リンクをクリックし、[newScale] をクリックし、[使用できるエントリ (Available entries)] テーブルから 1 つ以上のロールを選択し、追加矢印をクリックしてこれらのロールを [選択されたエントリ (Selected entries)] テーブルに移動し、[OK] ボタンをクリックします。次に、追加した新しいロールに適切な権限を設定する必要があります。作業の完了後に [OK] ボタンをクリックし、[プロパティを設定 (Set properties)] ページを閉じます。
-

このロール変更手順は、カスタム レポートにのみ適用されます。Prime Service Catalog に付属の標準レポートは変更できません。

Reporting のアンインストール

Reporting モジュールをアンインストールするには、最初に IBM Cognos ソフトウェアをアンインストールし、次に Cisco Prime Service Catalog Reporting モジュールをアンインストールする必要があります。

IBM Cognos をアンインストールするには、次の手順を実行します。

-
- 手順 1 [スタート (Start)] メニューから [IBM Cognos 10-64] > [IBM Cognos のアンインストール (Uninstall IBM Cognos)] を選択します。
 - 手順 2 アンインストール ウィザードのウィンドウで、両方のモジュールを選択するため [すべて選択 (Select All)] をクリックします。
 - 手順 3 [次へ (Next)] をクリックします。
 - 手順 4 アンインストール ウィザードのウィンドウでは、フォルダをすべてアンインストールする 2 番目のオプションを選択することが推奨されます。

- 手順 5 アンインストールが完了したら、Cognos ファイルをマシンからクリーンアップするため、ファイルエクスプローラで IBM Cognos のインストール先フォルダに移動し、このフォルダを手動で削除できます。
-

Cisco Prime Service Catalog Reporting モジュールをアンインストールするには、次の手順を実行します。

- 手順 1 ファイル エクスプローラで [Cisco Prime Service Catalog Reporting] フォルダに移動し、右クリックして [アンインストール/変更 (Uninstall/Change)] を選択します。
- 手順 2 [アンインストールオプション (Uninstall Options)] ウィンドウで、[完全なアンインストール (Complete Uninstall)] を選択します。
- 手順 3 アンインストールが完了しても Cisco Prime Service Catalog Reporting フォルダが表示される場合は、手動で削除してください。
-

